

一卷頭エッセイ

市民の目と地質学

小 玉 喜三郎¹⁾

「ようやく、一つ一つの鍵層の違いが区別できるようになりました。これまで何の気も止めずに通り過ぎていた道ばたの露頭が、どれが古く、どれが新しいか、露頭の見方がこれから変わりそうです…」

これは、先日のある休日に、熱心な地元の地学同好会の方々を案内して房総半島の地質見学を終えたとき参加者から頂いた感想です。一昨年の夏、地質調査所の玄関ロビーで「最新地質図発表会」が開かれた際、展示された地質図を見られた同好会の方から、いつか現地を案内して下さいと頼まれたのがきっかけでした。気楽に「いいですよ」といって、実はすっかり忘れていたのですが、同好会の方々はこの間に、何回も勉強会やクリノメーター使用法の講習会までされ、今回、2泊3日の現地実習となったのです。

参加者は、お見受けしたところ30代から60代の、女性も交えた6名で、学生時代からあこがれていたフィールド調査を納得行くまでやってみたくという方や、いまは電子や機械関係の仕事から引退された技術者などで、一方の案内者も、地元の学校の先生など、昔から一緒に調査をしてきた数名の仲間、マンツーマン以上の案内をする事になりました。そして、3日をかけて走向方向に鍵層を追跡しては地質図を作成するというメニューを実習したわけです。

とにかく、身の周りの自然は何でも知りたいという熱意と探求心には案内者の方こそ学ぶ事が多く、「最近、大学でも地球科学の範囲が拡大し、その分、時間のかかるフィールド調査をベースとした研究者が少なくなっているんですよ…」等という話は、同好会の方には信じられない様子でした。私自身、日頃は専門化・抽象化したごく狭い研究分野に関心が向いてしまい、なかなか広い興味を失いがちですが、生活と密着した身の回りの地学に対する興味を、徐々に思い出させられた3日でした。

ところで、地質調査所の行う研究業務は、大きく2つの目標があると説明しています。第一は、資源・エネルギーの安定的な確保、開発のための調査・研究。第二は、生活の安全と国土の有効利用のための研究です。地質図幅や重力図など地球科学図作成の研究は、全ての基本となる実態の解明を目的としています。しかし、第一と第二では、その成果の利用者は自ずと異なり、前者は資源開発を担当する高度な地質学の専門家、後者は建設や都市計画を担当する専門家あるいは自治体の政策立案者、さらに一般の市民など、多くの利用者に広がります。そして、これから脱工業化社会が進展すると、後者の比重がますます高まり、当所の業務に対する社会からの要請も大きく変わっていくだろうと予想しています。

一昨年、大学、企業、他研究所などの有識者の方々にお願いし、当所の業務の「外部評価」をしていただきました。その結果、これまで長い期間にわたり系統的に実施してきた多くの調査や研究に高い評価を頂いた一方で、「時代とともに変化する新たな要請への果敢な対応と、利用者の視線に立った分かりやすい情報の提供がこれまで欠けていたのではないか」とのご指摘を受けました。当所ではこれらのご意見を生かし、来年度から「地震地質部」の新設など、研究室・研究部の再編を実施する予定で、新たな地質科学の分野への対応をいっそう強化していこうとしています。

産業の基盤をなす様々な資源や探査技術についての研究から、身の回りの地質環境に至るまで、当所の課題はますます拡がりつつあります。帰路、特急「さざなみ」の車窓いっぱい広がる真新しいウォーターフロントの都市を見ながら、ここに住む市民が安心して暮らすために、地質学はどんな役割を果たしているのか、様々な思いを巡らせた休日でした。

1) 地質調査所 次長

キーワード：市民、ウォーターフロントの地質